

おはようございます。

1月最後の礼拝となりました。年度末が近づいてくると、新年度に向けての準備が忙しくなります。教会でも、来年度の計画や予算が立てられていきます。とりわけ、今年度は教会役員の交代がありますので、さまざまな引継ぎや総会に向けての準備など、みなさん忙しく働かれておられることと思います。私たち神戸西教会も、昨年11月の半ばに26年度から27年度にかけて働いてくださる教会役員の選挙、執事さんを決める選挙が行われました。私たちの国では、何のためにやるのかわからないような大きな選挙が莫大な費用をかけて行われようとしています。教会の役員選挙はまったくお金がかかりませんし、ある日突然、解散して選挙を行うということもありません。よい選挙だなあとと思いますが、私たちが学んでおります初代教会の中で、最初の執事が選ばれたのが今日の聖書の箇所になります。一緒に読んでみましょう。使徒言行録6章1節から7節、【そのころ、弟子の数が増えてきて、ギリシア語を話すユダヤ人から、ヘブライ語を話すユダヤ人に対して苦情が出た。それは、日々の分配のことで、仲間のやもめたちが軽んじられていたからである。そこで、十二人は弟子をすべて呼び集めて言った。「わたしたちが、神の言葉をないがしろにして、食事の世話をするのは好ましくない。それで、兄弟たち、あなたがたの中から、“霊”と知恵に満ちた評判の良い人を七人選びなさい。彼らにその仕事を任せよう。わたしたちは、祈りと御言葉の奉仕に専念することにします。」一同はこの提案に賛成し、信仰と聖霊に満ちている人ステファノと、ほかにフィリポ、プロコロ、ニカノル、ティモン、パルメナ、アンティオキア出身の改宗者ニコラオを選んで、使徒たちの前に立たせた。使徒たちは、祈って彼らの上に手を置いた。こうして、神の言葉はますます広まり、弟子の数はエルサレムで非常に増えていき、祭司も大勢この信仰に入った。】

イスラエル民族には、ディアスポラと呼ばれる人たちがいました。イスラエルはかつて、北イスラエル王国がアッシリア帝国によって滅び去り、南ユダ王国もバビロニア帝国によって滅ぼされました。そのバビロニア帝国は後にペルシア帝国によって滅ぼされ、バビロンで捕囚になっていたイスラエルの人々は解放され、エルサレムの都に戻って破壊された神殿を立て直しました。ところが、バビロニア帝国が滅ぼされた後もエルサレムには帰らないでバビロンに残った人々がいました。高齢者や幼い子どもたちを連れた家族、病の人を抱えた家族は帰りたくても帰ることができませんでしたし、バビロンの地に50年も住んでいればそこを離れたくない人たちだっていました。また他にも、イスラエル地方から移住して他の地域に住んでいったユダヤ人たちもいました。こうして、ユダヤ人でありながらイスラエルの地に住まない人たちが少しずつ増えていきました。この人たちのことをディアスポラと呼びます。ディアスポラの人たちは、だんだんとヘブライ語を話さなくなっていきました。彼らの住んでいた土地の言葉は、公用語としてギリシア語が使われていたからです。日本人でも外国に移住すると、2世くらいまでは何とか日本語を話せるのですが、3世になるともうほとんど日本語が話せなくなります。同じように、ディアスポラとして外国で生活しなければならなかったイスラエル人も、ほとんどヘブライ語を話すことができなくなり、公用語であるギリシア語を使うユダヤ人が増えていったのです。

それでも、ユダヤ人の集まりではまだヘブライ語が主流だったのでしょう。ですから、

ギリシア語しか話せないユダヤ人たちが、自分たちの主張をきちんと伝えることができず、食事の分配のことでヘブライ語を話すユダヤ人たちに対して苦情が来たのです。言葉がうまく通じないことをよいことに、ギリシア語を話すユダヤ人たちだけが不平等に扱われた。量が少なかったり、手抜きがあったりしたとを感じるようなことでもあったのでしょう。ギリシア語を話すユダヤ人から苦情が出てきます。食べ物の恨みは怖いのです。

この苦情は、初代教会を取り仕切っていた十二使徒のところに告げられます。初代教会の初期のころの教会運営は、十二使徒が行っていたようです。これは、ユダヤ人の生活形態に似ています。ユダヤ人のコミュニティをまとめていたのは、祭司たちでした。祭司は宗教的な責任だけではなく、コミュニティ内で起こったトラブルの解決、いわゆる裁判所のような働きですが、そのようなもめ事を取り扱っていました。他にも、たとえば病人が出たときなど、問題はすべて祭司のところへ持って行っていったようです。これは何もユダヤ人に限ったことでもなさそうです。私が福岡教会にいたころ、礼拝にまったく来たこともない人が牧師に相談事があるので聞いてほしいとやってきたことがあります。その女性の相談事がどんなことだったのかはまったく覚えていませんが、彼女は帰り際にこんなことを言いました。「昔は、お寺のお坊さんが相談事を何でも聞いてくれたけど、このごろは何も聞いてくれないのよ。それで、教会の来たの」。日本においても、お寺という宗教施設がよろず相談窓口の役割を果たしていました。イスラエルにおけるよろず相談の窓口は祭司の働きでしたが、初代教会においてはイエス様の愛弟子だった十二使徒に引き継がれていきます。そこで十二使徒たちは、人々に福音を説く御言葉の働き以外にも、生活の世話や食事の世話などもすべて、行っていました。こうして、ギリシア語を話すユダヤ人からの苦情は、十二使徒の元へと持っていかれたのです。

すべての働きが一つ所に集中すると、必ず弊害が起きます。出エジプト記で、エジプトの奴隷から解放されたイスラエルの人々は、彼らを導き出したモーセを頼りにします。モーセもまた、奴隷から解放されたイスラエルの人々のさまざまな問題に耳を傾け、熱心に聞いたことでしょう。でもそれは、結果的にモーセを疲弊させてしまいます。出エジプト記18章には、エジプトの奴隷から解放されたイスラエルの人々が、あらゆる問題をモーセのところに持ち込んでいる状況を見て、モーセのしゅうとであったエトロがモーセに知恵を授ける場面が出てきます。モーセのしゅうとのエトロは、モーセが朝から晩まで裁きの座についてイスラエルの民の裁きを行っていたようすを見て、このやり方はよくないと思い、モーセに助言します。出エジプト記18章17節、「あなたのやり方は良くない。あなた自身も、あなたを尋ねて来る民も、きっと疲れ果ててしまうだろう」。そこでエトロは、民の中から神を畏れる有能な人で、不正な利得を憎み、信頼に値する人物を選び、千人隊長、百人隊長、五十人隊長、十人隊長として民の上を立てることを提案します。十人隊長で解決しないことは、五十人隊長、それでもだめなら百人隊長、千人隊長、そして最後はモーセ自身が裁きを行うシステムを作り上げます。これは今の日本の裁判所制度が、最初は地方裁判所から始まり、次は高等裁判所、最後に最高裁判所へと徐々に上がっていくシステムとよく似ています。モーセの代わりに他の隊長たちを立てたのと同じように、十二使徒たちは祈りと御言葉の奉仕に専念し、その代わりに食事や生活の世話をする人たち、執事が選ばれたのです。その執事を選ぶ基準が、今日の聖書の箇所、使徒言行録6章3節に記されています。「“霊”と知恵に満ちた評判の良い人を7人選びなさい」。教会

で食事や生活の世話をする人たちは、知恵に満ちた評判の良い人だけではだめなのです。

“霊”に満ちた人でなければなりません。同じように、私たちが総会の選挙で選んだ執事さんたちは、「“霊”と知恵に満ちた評判の良い人」ということになります。違うことはただ一つ、神戸西教会では執事さんは5人しかいません。それ以外は基本的にはここに記されていることと同じことが行われているのです。私たちが選挙で選んだ執事さんたちは、ご本人が意識しようとしまいと、全員が神様によって選ばれた人たちであり、“霊”と知恵に満ちた評判の良い人たちなのです。そのことをしっかりと覚えていきたいと思えます。

それでは教会の働きは選ばれた執事さんたちだけに負わせておけばよいのでしょうか。いいえ、そうであってはなりません。とりわけ、私たちバプテスト教会は万人祭司主義をとっておりますので、多かれ少なかれ、すべての人が執事としての働きを共に担うのです。その中で、特に先頭に立ってまとめてくださるのが、教会役員の方々の働きと考えるとよいでしょう。それでは、神戸西教会に集うすべての人が担う執事の働きとは、いったいどのようなものなのでしょうか。

来週から2月に入りますが、2月はスチュワードシップ月間として1ヵ月間、スチュワードシップについて一緒に学んでいきたいと思えます。神戸西教会では、スチュワードシップという言葉は、あまり聞きなれない言葉だと伺いました。スチュワードシップとは、管理者としての働きを表す言葉です。バプテスト教会ではよく用いられる言葉です。スチュワードという言葉の女性形は、昔の人ならよく知っているスチュワーデスという言葉になります。このごろは、性別による言葉の区別をしないようになりましたので、スチュワーデスという言葉はなくなり、代わりにキャビン・アテンダント、CAとか、客室乗務員という言い方になっています。今はすっかり死語となってしまったスチュワーデスさんの働きと言えば、飛行機に乗っているお客さんが快適に過ごすことができるようにサービスを行う人たちのことを言います。相手に仕える働き。ヨハネによる福音書13章に、最後の晩餐の席上でイエス様が弟子たちの足を洗われた洗足の出来事が出てきます。そこでイエス様は、弟子たちにこう言われました。ヨハネによる福音書13章14節、「ところで、主であり、師であるわたしがあなたがたの足を洗ったのだから、あなたがたも互いに足を洗い合わなければならない。わたしがあなたがたにしたとおりに、あなたがたもするようにと、模範を示したのである」。このように、イエス様御自身が弟子たちに仕える者として模範を示され、同じように弟子たちに、互いに仕え合うようとおっしゃってくださいました。この言葉は、私たち一人一人に向けて語られた言葉であり、この出来事こそが、スチュワードシップということをととてもよく言い表しているのです。

昨年の9月から使徒言行録を読み始めましたが、12月はクリスマスなので1ヵ月間、ルカによる福音書をご一緒に読みました。そして1月になって使徒言行録に戻ってきましたが、2月の1ヵ月間はスチュワードシップ月間としてまた使徒言行録を離れて、スチュワードシップということについて一緒に学んでいきたいと思えます。みなさんもぜひ、スチュワードシップという言葉覚えて、それを実践することができるように、来週から共に学んでいきましょう。

お祈りします。